

隠れた名曲・佳曲を集めて 第6回

プログラム

今日は「隠れた名曲・佳曲を集めて」の特集、その第6回目をお送りします。
パヴァーヌとは16世紀初頭の宮廷舞曲を言いますが、フォーレのパヴァーヌはゆったりと優雅に歌い、繊細な響きからは哀愁を感じさせ、ドビュッシーやラヴェルに大きな影響を与えたと言われている名曲です。シューマンのピアノ四重奏曲は「室内楽の年」といわれる1842年に完成された作品で、傑作ピアノ五重奏曲の影に隠れがちですが、豊かな楽想とロマンティックな美しさに溢れた充実した響きはピアノ五重奏曲に勝るとも劣りません。ロマン派屈指の名曲です。ラヴェルの「左手のためのピアノ協奏曲」は戦争で右手を失ったヴィトゲンシュタインというピアニストのために作曲された作品で、両手で弾いていると錯角する程の高度な技巧とヴィルトオーゾ・スタイルは、名作ト長調ピアノ協奏曲とは対照的に、暗く重い色彩を持っています。ピアノ協奏曲の中でも特異な位置を占める名作です。エルガーのヴァイオリン協奏曲は1910年作者53歳の時の作品で、約50分を要する長大作。冒頭から哀愁を帯びたエルガー節が始まり、派手さはないものの高度な技巧を必要とするヴァイオリンから溢れ出るロマンティックな味わいは格別で、終楽章には伴奏付きの長大なカデンツァが用意されており、巨匠クライスラーに献呈されました。ヴァイオリン協奏曲の隠れた名曲のひとつです。グリークの交響曲は1864年21歳の時に完成させた作品で、力強い響きと若々しい生命力に溢れた表現が魅力で、グリークの新たな一面を発見出来る佳曲です。ごゆっくりお楽しみください。

ガブリエル・フォーレ (1845~1924) :

パヴァーヌ *op.50*

大野和士指揮リヨン国立歌劇場管弦楽団
(2008.10.24 サントリーホールでのLive)

ロベルト・シューマン (1810~1856) :

ピアノ四重奏曲変ホ長調 *op.47* ~ 第1楽章、第3楽章、第4楽章

ドミトリ・シトコヴェツキ (ヴァイオリン) / キム・カシユカシアン (ヴィオラ)
ダヴィッド・ゲリンガス (チェロ) / ミシエル・ダルベルト (ピアノ)
(1995.6.1 ウィーン・コンツェルトハウス・モーツァルトホールでのLive)

モーリス・ラヴェル (1875~1937) :

左手のためのピアノ協奏曲ニ長調

ヴラド・ペルルミュテール (ピアノ)
ジョセフ・ローゼンストック指揮NHK交響楽団
(1972.10.16 東京文化会館大ホールでのLive)

*** 休憩 ***

エドワード・エルガー (1857~1934) :

ヴァイオリン協奏曲短調 *op.61* ~ 第1楽章、第2楽章から、第3楽章から

ギル・シャハム (ヴァイオリン)
デイヴィット・ジンマン指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団
(2008.10.25 ベルリン、フィルハーモニーホールでのLive)

エドヴァルド・グリーグ (1843~1907) :

交響曲ハ短調 *EG.119* ~ 第1楽章、第2楽章、第4楽章から

広上淳一指揮サールブリュッケン放送交響楽団
(1993.10.24 サールブリュッケン、コングレスハレ大ホールでのLive)